

豊臣秀吉朝鮮侵略の史跡を訪ねて (三)

中 川 浩 一

国民学校初等科生徒の当時、豊臣秀吉による「朝鮮征伐」の呼称で教えられた史実が、朝鮮王国当時の国土と住民に、いはいれぬ荒廃をもたらした侵略戦争であったと気付かされたのは、一九七六年の冬に、小・中学校教員を構成員とする史跡見学旅行団に同行して、韓国慶尚北道慶州市郊外の仏国寺を見学したおりであった。

巧みな日本語で私たちに対して熟年世代の男性ガイドは、西暦五三五年に創建され、法隆寺をしのぐ年月を背負う古刹も、往時をしのばせるのは、大理石で造った基壇と石塔のみであると説明した。いま眼にする壮麗な堂宇は、大韓民国復権以来の修築事業の成果と説明した。^{注1}

「朝鮮征伐」が、天皇の存在をないがしろにし、秀吉を日本国王に封じようとした明国皇帝と、これに服属する朝鮮国王を「膺懲」する正義の戦いと教えた皇国史観で洗脳された史実理解にとって、文化財を破壊しつくした秀吉軍団の蛮行に対する指摘は、全くのオドロキであった。

最初に眼にした日本語文献

最近でも文禄・慶長の役と日本では呼ぶことの多い豊臣秀吉の朝鮮侵略を、韓国では壬辰・丁酉倭乱と称している。文禄・慶長が年号にちなむのに対し、干支（えと）を基底におく表現にはかならない。その実態がいかに過酷な存在であったかについては、北島万次『豊臣秀吉の朝鮮侵略』（平成七年・吉川弘文館）が、具体的に明ら

かにする。そのことにかかわる史跡を現地に探訪してみたいと思つたのは、茨城大学に勤務した当時、韓国国立忠北大学から文部省給費による日本文化理解留学生の指導を委託された一九九〇年代当初の時点であった。とはいえ、具体的な情報が断片的に得られるだけで、全体像を容易に把握する途は、とざされていた。

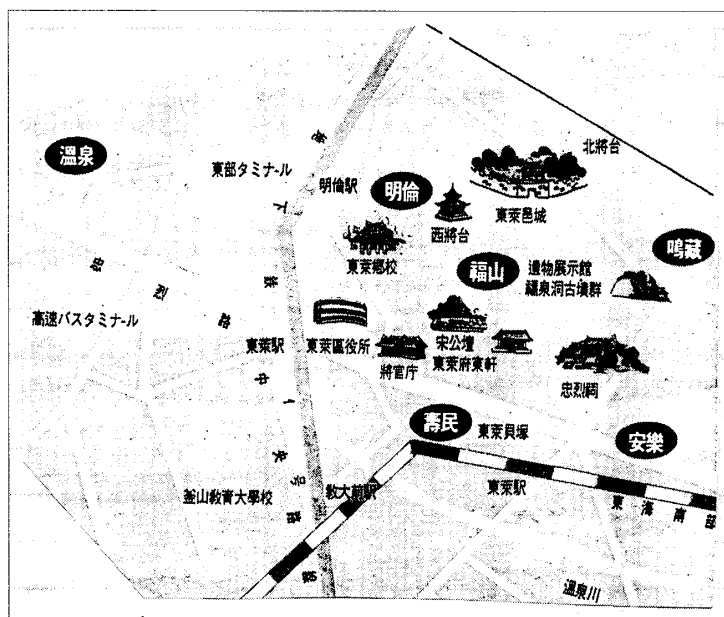
早い時点で侵略にかかわる史跡の存在を知りえた文献は、小林慶二『観光コースでない韓国―歩いて見る日韓・歴史の現場』（一九九四年・高文研）であった。紹介する範囲は、釜山・慶尚南道に限られてはいるけれども、壬辰倭乱第二日に生じた東萊邑城の戦いに由来する忠烈祠の存在、壬辰倭乱に際しての晋州城攻略にかかわる「義妓祠」のエピソード、さらに加えて壬辰・丁酉のほぼ全期にわたり、創案した亀甲船を率いて善戦し、秀吉軍の海上兵力撃破に貢献した李舜臣の本拠地となった忠武（現・統営）の史跡が、数多くの写真を配して収録されていた。

ついで眼にしたのは、神谷丹路『韓国近い昔の旅―植民地時代をたどる』（一九九四年・凱風社）で、サブタイトルとは相違するが、壬辰倭乱で漢城（現・ソウル）に侵攻した日本軍を敗退させた幸州山城の戦いにかかわる記念碑と戦いの様相を描いたレリーフへの言及であった。

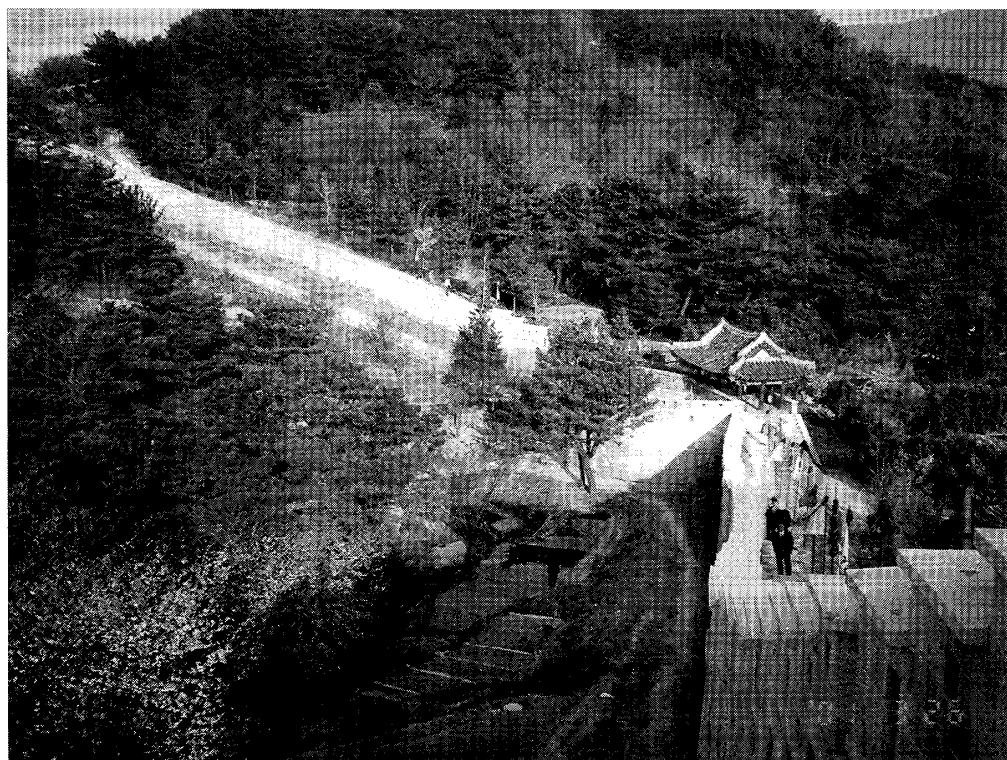
これらの詳細については、いずれも公刊物であるから、具体的な言及は屋上に屋を架する無益の業であろう。

城門城壁を復元した東萊邑城

壬辰倭乱の発端は、宣祖二十五（一五九二＝文禄元）年、小西行长・宗義智の率いる第一軍の船団が、全く突然に釜山浦を侵攻したのに由来する。釜山湾への風波をさえぎる位置を占める絶影島で狩猟中の釜山鎮水軍僉使の鄭撥は、侵攻を確認して急遽釜山鎮に戻った後、明国征服のために朝鮮通行を要求した豊臣軍と対峙する。だが圧倒的な兵力差のゆえに釜山鎮は一日で陥落し、鄭撥は戦死した。勇戦した鄭撥の銅像は、皮肉にも日本総領事館と隣り合わせの位置を占めて、市街を南北に貫くメインストリートの中央路に面して



地図① 東萊地区見取図 東萊邑城のイラストは北門の位置を示す。東萊府東軒は対馬藩との通商・外交を扱った朝鮮側官庁で、一部が復元保存されている。
東萊区役所発行のパンフレットによる



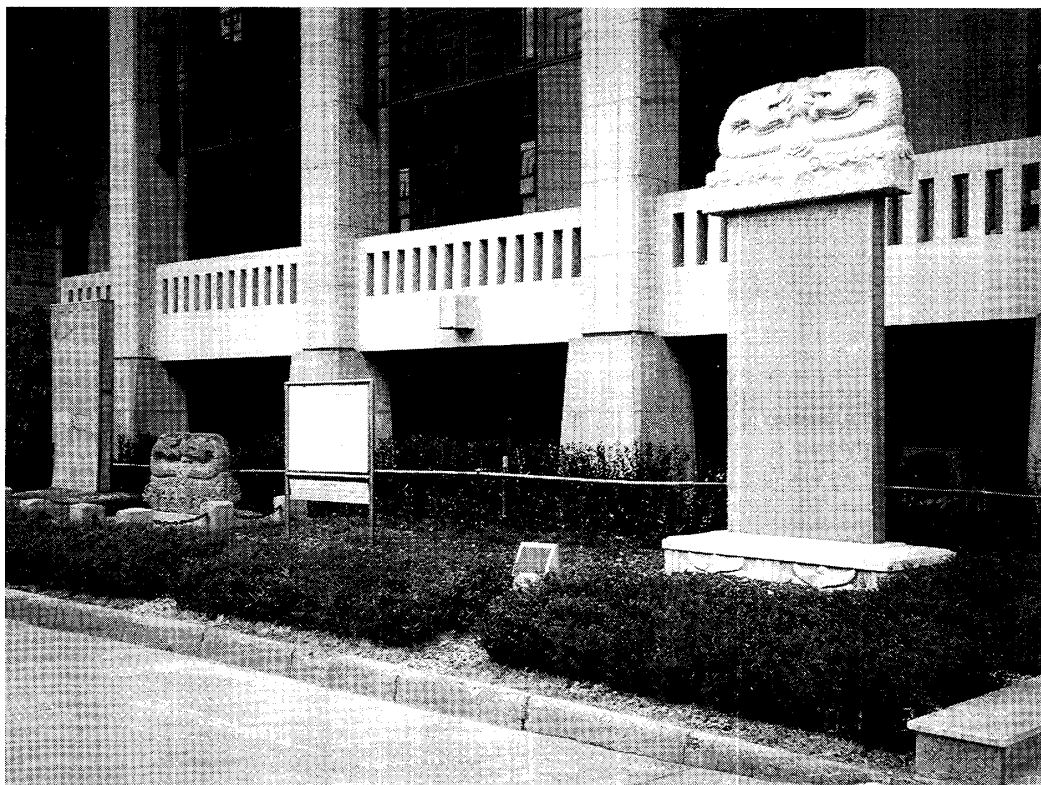
写真① 復元された東萊邑城北門と城壁（2001年3月写）

建っている。

釜山鎮を攻略した第一軍は、翌日には東萊府使宗象賢が軍民を率いて立籠もった東萊邑城に殺到した。東萊邑城での戦闘の状況は、前回に言及した釜山市東萊区に位置する忠烈祠での展示や「東萊府殉節図」^{注2}を介して理解したつもりであった。とくに東萊邑城での戦闘の全景を描いた「東萊府殉節図」には、平地に城壁をめぐらし、



写真② 東萊邑城北門付近の城壁からみた東萊邑城内跡地
画面中央の山頂に東萊邑城南門が見える（2001年3月写）



写真③ 釜山市立博物館に移設された東萊南門碑（左端）とそのレプリカ（右）（2001年3月写）



写真④ ソウル都心の奨忠壇公園に建つ松雲大師の銅像（1996年3月写）

東萊邑城に立籠もり勇戦の末に玉碎した軍、官、民の人たちに対して、一六七〇年に「東萊南門碑」が、南門の近くに建てられた。現在では釜山市立博物館構内に移設されて公開されているけれども、三百年以上にもわたる歲月によって破損が著しい。そのため、併設してレプリカが設置され、往時を偲ばせている。碑の建立由来は、漢字併記のハングル文と英文に詳記される。日本語による表示は簡単で「東萊忠烈碑とも呼ばれるこの碑は秀吉の乱（一五九二―一五九八）のとき東萊府の軍、官、民の殉国者達を記録し記念碑を建てるまでの経緯を記した。当時の激戦地であった東萊邑城の南門の外にあったものをここに移した」と記されている。

終戦処理に貢献した松雲大師

四方に城門を配した形態が示されている。だが現地に立ってみた東萊邑城跡は典型的な朝鮮式山城で、馬蹄形に連なる山並みの尾根上に城壁をめぐらし、巾着の口にあたる低地にも尾根上の城壁に接続する城壁が配される構造であった。三方を山地で囲まれ、巾着の内部分にあたる盆地の底部に集落を取りこむ形での構築であり、「東萊府殉節図」とは全く様相を異にしていた。

城がまさに陥落しようとするとき、宗象賢は漢城に向かって拝礼し、扇面に「弧状月暈り、大鎮救わず、君臣の義重く、父子の恩軽し」と父あての辞世を残して戦死したと伝えられるが、その状況は、忠烈祠内の展示館に壁画として示されている。^{注3}

韓国の古刹を訪れると、壬辰倭乱の兵火で荒廃した後、再建されたとの説明を受ける事例が数多い。豊臣軍のかかる蛮行は、僧侶が義兵として勇戦し、その鎮圧に手を焼いたことへの対応である様だ。勇戦した僧侶の中では活躍が戦後処理にも及んだ松雲大師（泗冥大師）の存在が、ひとときわ眼をひく事例といえるだろう。松雲大師（政の存在は、一九九六年に、三一運動のヒロイン柳寛順の銅像を見学する目的で、ソウルの都心に位置し、南山北東麓に広がる奨忠壇公園へ足を運んだおり、これも銅像の建立を介してまず気づかされ



写真⑤ 松雲大師の遺品を展示する「遺物館」（2001年3月写）



写真⑥ 松雲大師顕彰の「表忠祠」（2001年3月写）

た。基盤には、勇戦する僧兵軍を題材とするレリーフが取り付けられていた。

松雲大師の存在は、NHKテレビが人間講座の一環として取りあげた「朝鮮通信使」(二〇〇一年四月五月放映・全九回)で詳細に知られる様になった。仲尾宏京都造形芸術大学教授執筆のテキストには、「師である葆眞大師休静の命を受けて義僧軍をひきいて活動した傑僧」で、「戦中の一時期に加藤清正と講和談判をしたこともあった」と戦時の行動が紹介されている。^{注4}

一六〇四(慶長九)年、朝鮮朝廷は、民間人である松雲大師に「開諭書」を託して、対馬へおもむかせた。一五九九年以来、対馬から国交再開を懇請する使者が渡海するのに加えて、関ヶ原合戦に勝利して政権を把握した徳川家康には、再侵略の意図がないと判断された事態への対応でもあった。

松雲大師来島の報を受けた徳川家康は、国交再開交渉を命じられている対馬藩に、京都での会談承諾を伝達した。伏見城で徳川家康に面接した松雲大師は、国交再開要請が幕府の意志に基づくとの言質を得た。加えて朝鮮朝廷から「探賊使」として派遣された松雲大師は、一三九〇名に達する被虜人が故国の土を踏む成果をもちとった。

壬辰・丁酉倭乱の終戦処理に大きな功績を残した松雲大師を顕彰する表忠祠は、慶尚南道密陽市東郊の丹陽面に座を占める載薬山表忠寺境内に設けられている。密陽には、韓国国鉄京釜線の利用でゆきつける。超特急セマウルの一部が停車するし、特急ムグンファならば、全列車の利用が可能である。釜山から六二キロ、一時間たらずの行程に相当する。

遺物館もある顕彰の寺院

表忠寺の位置は、『韓国道路地図』^{注5}(一九九三年・中央地図文化社)で検索すると、密陽駅の東北東に位置し、直線距離で約十八キロと判定できる。洛東江の支流である密陽江(上流は丹陽川と呼

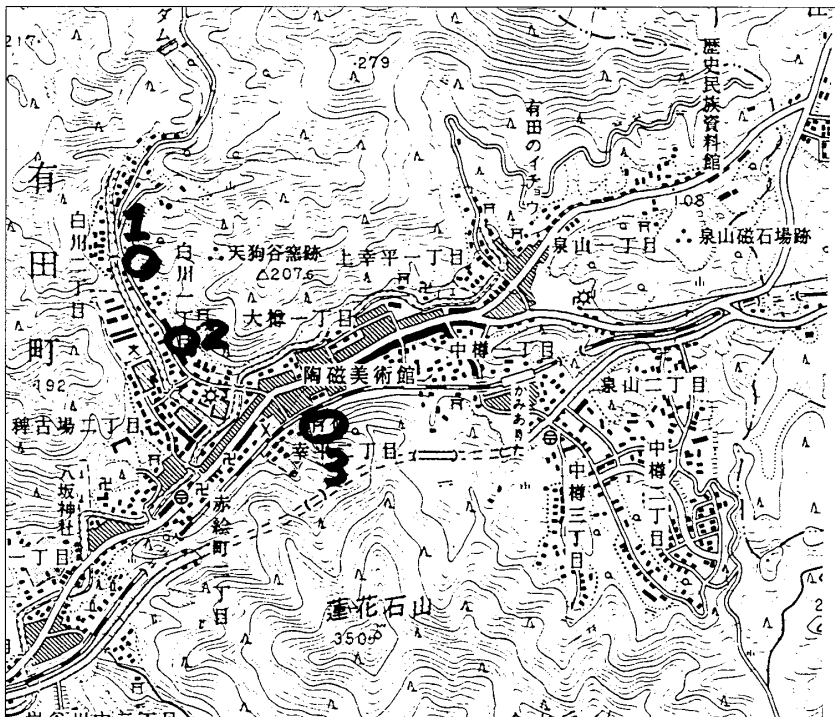
ぶ)の奥まった谷底にあって、背後に載薬山(二一〇二メートル)がそびえるのが、山号の由来だろう。ハンゲルの読めない日本人旅行者は、タクシー利用でゆきつく以外に方法がないけれど、筆者はJR九州が企画した「朝鮮通信使の足跡と文化を訪ねる」ツアーに参加したため、密陽駅前広場には貸切の観光バスが待機していた。「表忠寺」の寺号を額にかかげて酬忠樓と呼ばれる山門を潜ると、参道左手に遺物館が建ち、松雲大師ゆかりの品が数多く展示されている。それらのいくつかは、写真を主体とする『載薬山表忠寺』(一九九七年)に収められるが、漢字表記が極少なため、詳細な判読はできなかった。

少し離れた位置に「表忠祠」の題額をかかげる韓国様式の建物がある。この中に松雲大師の画像が収められていた筈だが、迂闊にも見落としてしまった。遺物館には漢文で書かれた「三賢師忠勲大略」と題する文書が展示されていた。

ツアー参加者に配布された江原大学校教授孫承喆先生執筆の冊子『朝鮮通信使と日・韓関係について』によると、妙香山普賢寺の休静大師に師事していた松雲大師は、義僧兵を集め、平壤城の奪還以後、壬辰・丁酉の両倭乱に、多くの戦功をあげたと記されている。表忠寺は、松雲大師が住職を勤めた場所ではなく、一六一〇年、海印寺で病に倒れ入寂した。密陽の表忠寺に祭享され、著書には四溟堂文集七巻があり、との記事から、韓国三大名刹のひとつで、高麗高宗が在位中に、一二三六年から十二年の歳月を費やして造版され、八万一二五八枚に及ぶ「八万大藏経板殿」の所蔵で世界遺産登録される海印寺(慶尚南道治湍面)とかかわる事実が読みとれた。海印寺は、壬辰・丁酉の両倭乱の戦火をまぬかれた数少ない古刹の一つであることを、一九九九年三月に訪れて確かめている。

天皇・藩主と共に神となる李参平

壬辰・丁酉の両倭乱では、降伏または帰順した兵士の捕虜以外に、数は定かでないけれど数万と見積もられる民間人の連行者が日本各



地図② 1 : 25,000 「有田」 平成 9 年修正

- 1 は金ヶ江三兵衛 (李参平) 墓 2 は李参平屋敷あと
3 は陶山神社と陶祖李参平碑

地での居住を余儀なくされた。連行の事実については、中学校社会科の教科書には、「朝鮮から連行された陶工によって、すぐれた技術が伝えられ、有田焼や萩焼、薩摩焼など、のちに各地で名産となる磁器や陶器が生まれた」注6の記述があり、また司馬遼太郎による長編歴史小説『故郷忘れ難く候』の刊行などによって、焼物戦争の別称も知られる様になってきた。しかし日本各地へ強制連行された朝鮮人は、教科書が記す陶工だけではない。労役の対象に支配地から多くの農民を朝鮮に伴い、その消耗を強いられた各地の大名は、農業労働力としての駆使を前提に朝鮮人民衆を数多く拉致している。ポルトガルの商人に奴隷として売られた朝鮮人も数多いという。切

支丹として神津島に流され、殉教の生涯を閉じた女性もある。注7
これら老若男女にまたがる数多くの被虜人の中で、最も著名な存在は、前記の教科書に「陶祖李参平碑」の写真が掲載される「帰化人李参平」かと思われる。それゆえJTBのポケットガイド『九州』(一九九九年改訂7版)にも地図を配して紹介される有田焼発祥ゆかりの地を、表忠寺の見学後、釜山、厳原(対馬)を経由して舶着した博多から、JR利用で訪ねてみた。

「陶祖李参平碑」が、陶山神社を配する有田公園に設置される事実は、前記のガイドブックに明示される。最寄り駅はJR佐世保線上有田駅で、特急が停車する有田駅で下車すると、タクシー利用が必要だろう。

上有田駅から線路と平行に有田駅方向へ十分ほど歩き、有田ダムに通じる車道を右にわたる交差点で左折し、踏切を渡ると、有田公園に足を踏み入れる。陶山神社の拝殿に通じる階段と白磁の鳥居がすぐ眼に入るけれど、参道脇に置かれた標示板の記事にまず眼を向けよう。

陶山神社と磁器鳥居

祭神 応神天皇・鍋島直茂公・李参平公

祭日 陶祖祭五月四日 例祭十月十六日・十七日

創建 万治元年(一六五八年)八月、有田郡社八幡宮(伊万里市二里町大里)のご分霊を祀る

由緒 ここ陶山神社は江戸時代「有田皿山宗廟八幡宮」と称される通り、有田町及び有田焼繁盛の「陶祖の神」として、有田町

を見渡す連華山麓の景勝の地に創建されました。四季おりおりに桜やツツジ、それに有田と縁の深い韓国の国花ムクゲを咲かせて神域を彩ります。周りを見渡せば白磁の狛犬(明治二〇年・西暦一八八七年赤絵町十代今泉今右衛門奉納)や染付の大鳥居(同二十一年神古場町奉納)、大水盤(同二十二年・中ノ原町奉納井手金作作)など有田ならではの風情があり、まさに陶山神社は皿山の野外歴史博物館そのものです。



写真⑦ 陶山神社拝殿 白磁の鳥居を背にして写した。階段の両脇に白磁の狛犬、白磁の灯籠が置かれている。(2001年3月写)



写真⑧ 丘の頂きに建つ「陶祖李参平碑」、階段の左手前に建つ碑が「大韓民国における李参平記念碑建設の事績」(2001年3月写)

顕彰碑は植民地支配時の建立

教科書の写真に収まる「陶祖李参平碑」は、拝殿の周辺には見当たらない。二万五千分の一地形図「有田」には、拝殿より高い位置で丘の頂上に記念碑の記号が表示されるので、拝殿左手から斜面を登る歩道をたどってみた。「陶祖李参平碑」の位置へは、神社を経由しない歩道が別に設けられ、途中に展望台がおかれている。さらに階段を登ると、「陶祖李参平碑」の基部にゆき着くことになる。階段の登り口には、日本語、漢字併記のハングル、英語で書かれたバイリンガルの説明標識が建っている。日本語では、左記の文章が配される。

陶祖李参平碑

元和二年（一六一六年）、高麗の陶工李参平は有田泉山の地で磁石礦を発見し、有田の白川で日本最初の磁器を作りました。大正六年（一九一七年）、有田焼創業三〇〇年を記念して「陶祖李



写真⑨ 「陶祖李参平碑」 (2001年3月写)

参平碑」が建立され、その後毎年五月四日にここで陶祖祭が催されています。

建立から八十年以上が経過するけれども、「陶祖李参平碑」は風化の跡をとどめない。基盤には、陶祖頌徳会建設の文字に加えて、大正六年十月 従四位鍋島直映書の刻字もなされていた。

階段のかたわらには、碑文を白磁の板に焼き付けた記念碑がもうひとつ建っている。文面を読解すると、日本の窯業関係者が募金して韓国に建立した李参平顕彰碑の由来と募金者の氏名を記すのが主旨と判るのだが、由来を記した文章は、一九九四年秋に『韓国日報』が、歴史歪曲の碑が、堂々と韓国内の公園に建っていると報じたものと同一の存在と思われる。ことの詳細は、嶋村初吉『李朝国使3000キロの旅』（一九九九年・みずのわ出版）に記されている。

日韓両国語で記された碑文は、日本語表記に従うと、『李参平は文禄慶長の役に際して来日され一六一六年九州有田泉山で磁石鉱を発見』となっていた由で、連行と書くべきを来日と書いて歴史を歪曲したとの指摘を受けた。韓国語の文章も、来日に相当する表現だったのであろうか。

戦後も続く「帰化」の思想

有田公園に建つ顕彰碑建立の由来を説く碑文を、左に転記しよう。

大韓民国における李参平記念碑建設の事績

李参平公は、文禄・慶長の役に際して来日され、一六一六年、有田の泉山で磁石鉱を発見し、日本で初めて白磁の焼成に成功しました。

公は日本磁器焼成の始祖として、有田焼発展にその生涯を捧げられ、明暦元年（一六五五年）有田上白川で逝去されました。

陶祖李参平公の偉大な功績を称えんと共に、日韓親善の絆として、平成二年（一九九〇年）十月二十六日、社団法人韓国陶磁器

文化振興会のご協力を得て、そのゆかりの地である忠清南道公州郡反浦面温泉里山鷄龍山国立公園入口に、李参平公記念碑を建立しました。

碑の建立に際して有田では「陶祖李参平公記念碑建立委員会」を設立し、この碑が李公に対する報恩と感謝の意を表し、国際親善と文化交流の象徴として建設されることを目的とし、広く町内外に呼びかけ寄付金の募集にあたりました。

ここにあらためて、目的達成のために多大なご協力、多額の寄付金を申し出て下さいました各位に対して、心より感謝の意を表します。

平成三年三月吉日

陶祖李参平公記念碑建設委員会

忠清南道に建ったとされる記念碑と同じく、ここでも「来日」の用語が用いられている。だが平成三年（十年前！）という時点で、「来日」と表現したのは、それなりの配慮をなした表現とみるべきかもしれない。その後においても、陶工連行を「帰化」^{注8}と表現する事例が存在したからである。

筆者が満六十五歳になり、文部教官を定年退職して共済年金受給者になったおり、振込金融機関を川崎信用金庫と指定したら、最寄支店の営業担当職員が、振込指定の謝礼品として有田焼の急須を持参した。その包装紙には「十六世紀末朝鮮より日本に帰化した李参平（のちに金ヶ江三兵衛と改名）」と書かれていた。

東日本では在日韓国・朝鮮人居住者が最も多く、一万人に近い「在日」人口を擁する川崎市においてさえ、この始末なのである。一九九六年の出来事であったと、書いておこう。

李参平関連の遺跡をみる

李参平記念碑の見学をすませ、『JTBのポケットガイド』収載の地図には李参平墓の表記もあるので、二万五千分の一地形図と照

合しながら、その検索を行ってみた。

ガイドブックの地図には、有田小学校にまちかの位置に表記がある。地形図には、墓地や史跡の記号は見あたらないが、有田小学校の校舎を左に見てまもなく、右手に墓地があり、その一隅に李参平墓の所在を示す標識が建っていた。

「史跡初代金ヶ江三兵衛（李参平）墓碑」と正面に記し、右側面に昭和四十二年三月二十日指定の文字が配される。左側面には昭和四十三年三月二十日建設とあり、木柱一本を建てるのに、一年もかかったスローモーションに驚かされる。

墓石は頂部が欠損しているが、供花がなされ、顕彰の対象であり続ける状況がうかがえる。金ヶ江三兵衛と記すのは、「帰化」の査定が当時の認識であった状況をうかがわせる。

上有田駅に向っていきました道を戻りかけると、有田小学校とほど遠からぬ位置の路肩に「史跡日本白磁器有田焼之祖李参平邸」と記す白磁の標柱が建つのに気付かされた。側面に建立者の居住地が、有田町、武雄市と併記されるから、町村合併が大規模に実施された



写真⑩ 金ヶ江三兵衛（李参平）の墓
（2001年3月写）



写真⑪ 李参平屋敷跡の標柱
(2001年3月写)

一九五〇年代以後の設置と判断できる。

コンクリート製の基盤には、白磁の板に焼き付けた建立の由来を示す文章が配される。片仮名を用いる文体に加え、大正六年九月と撰文の年月が記されるから、標識の円柱は再建されたものと判断できる。文面からは李参平が故国に背を向けて生涯の後半を過ごした様に読みとれるが、これが正しい史実なのだろうか。

序

我が陶祖李参平氏ハ朝鮮忠清道金江ノ人ナリ文禄元年豊公征韓ノ役ニ方リ我軍ノ為メ盡瘁スル所尠ナカラサリシハ慶長元年藩祖直茂公凱旋ノ際携ヘテ歸化セシメ參謀多久安順氏ニ屬セシム金江ノ人ナルヲ以テ金ヶ江姓ヲ冒ス初メ小城郡多久村ニ住シ其ノ習熟スル所ノ陶業ヲ創メシモ良土ヲ獲ズ元和年間松浦郡有田郷亂橋ニ來リテ陶業ニ從ヒ遂ニ泉山ニ於テ最良ノ磁石ヲ發見シ上白川ニ移住シ初メテ純白ナル磁器ヲ製出ス此レ實ニ本邦ニ於ケル白磁製造ノ嚆矢ナリ爾來其ノ製法ヲ繼承シテ以テ今日ノ盛ヲ見ルニ至レ

リ顧フニ李氏ハ我が有田ノ陶祖ナルノミナラズ本邦窯業界ノ大恩人ナリ苟モ斯業ニ從事シテ其ノ餘澤ニ浴スルモノ孰カ其ノ遺功ヲ欽仰セザランヤ

大正六年九月

從六位 千住武次郎撰

注

(1) 韓国観光公社『KOREA―魅力いっぱい韓国の旅ガイド』(一九九四年)には、仏国寺を「五三五年に創建され、二〇〇年後の最盛期には現在の一〇倍のスケールにまで拡大されましたが、壬辰の乱で焼かれ今の建物はその後修復されたものです。石造部分だけは当時のままで、新羅文化の完成度の高さを伝えています」と紹介する。

(2) 北島万次『豊臣秀吉の朝鮮侵略』の巻頭に収載の口絵に掲載される。釜山市立博物館の展示図録(ハングル表記)には、カラー図版として収められている。

(3) 中川浩一「豊臣秀吉朝鮮侵略の史跡を訪ねて」(二) 流通経済大学論集三五の一(二〇〇〇年)二四ページ。

(4) 仲尾宏『朝鮮通信使―江戸日本への善隣使節』(二〇〇一年)三六ページ。以後の記述も、このテキストに依存した。

(5) 韓国全域を五一図葉の切図でカバーし、縮尺は二五万分の一が標準で首都圏の四図葉は一五万分の一、済州島は二十万分の一で収載される。大縮尺市街図のカバーする範囲も広く、漢字表記版も刊行されている。

(6) 『新編新しい社会』歴史(平成八年文部省検定済)一一九ページ。

(7) 中川浩一『豊臣秀吉朝鮮侵略の史跡を訪ねて』(二) 流通経済大学

論集三十四の二（一九九九年）十三～十七ページ。詳しくは北島万次『豊臣秀吉の朝鮮侵略』（平成七年）吉川弘文館、『特別企画展・唐入―秀吉の朝鮮侵略』（一九九五年）佐賀県立名護屋城博物館を参照。

（8）「帰化」の用語について『広辞苑』第五版（一九九八年）を検索すると、「志望して他の国の国籍を取得し、その国の国民となること」の意が含まれる。